

カウコンフォート ～乳牛の快適性を考えた牧場に～

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科 2年 鈴木 穂乃歌

広大な放牧場でのびのびと過ごす牛たち。むしゃむしゃと草をはむ姿はとてもかわいらしく思わずうっとりしてしまいます。私の夢は、酪農家になることです。日本で一番有名で、最も牛たちのことを考えた牧場をつくることが目標です。

私が初めて牛に触ったのは幼い頃、母と姉と一緒に山梨県内にあるキープ牧場の酪農体験教室に参加した時でした。私は姉と一緒に搾乳体験をするには小さすぎたため、近くで牛たちを眺めていました。牛たちは朝の搾乳が終わると、少し歩いた場所にある広大な放牧場に誘導されていました。この時私はある光景にとっても驚きました。飼育員の方たちは、牛たちに何もつけずに声やジェスチャーだけで誘導していたのです。放牧場に出た牛たちは草を食べたり、寝転がったり、走り回ったりと、のびのび自由に過ごしていました。その光景を間近で見ていた私は、いつか私もここに立ちたいと強く願うようになり、やがて酪農家になりたいという夢へと変わっていきました。そして、その夢へ少しでも近づくため、神奈川県立相原高等学校畜産科学科に入学し、畜産について学ぶことにしました。さらに、授業以外でも牛と接することのできる畜産部相原牛プロジェクトに入部し、毎日のように牛と接する日々を過ごしています。

活動を始めて1年が経とうとしていた今年の1月、学校で長年飼育していた乳牛が乳房炎で淘汰されました。原因は「黄色ブドウ球菌」という伝染力が強く、根治するのが難しい菌でした。4つの乳房のうち1つを盲乳にするなど、懸命の治療をした結果、一時は治ったものの再発してしまい、淘汰となりました。出荷トラックに乗り、名残惜しそうに振り向く姿を見て、最後の調教、最後のブラッシング、何もできなかった自分がとても嫌で後悔しました。

今年の4月、私たちの学校はリニア中央新幹線の建設に伴い新校地へと移転し、牛舎の設備も最新のものと大きく変わりました。自動化が進み私たちの作業はとても簡単になり効率も良くなった半面、新しい設備に変わったことによる問題に直面しました。一つ目は、機械の不具合、操作ミスによる牛へのストレスの増加です。現在学校にはスクレーパーやバークリーナー、パーラーなど最新の機械がそろっています。私はその中でも最もストレス増加につながっているのは搾乳だと思います。これまでは、牛に自分の身体を密着させ、1頭ずつに合わせた丁寧な搾乳をしていたものが、新校の搾乳では機械が自動でミルカーを外してしまうためすべて同時離脱となります。今まで一本一本丁寧に搾ってきた学校の牛たちにとっては慣れておらず、狭いストールでの搾乳で足をあげたり、ストレスがかかっていることを感じました。二つ目は、けがの増加と早期発見が難しくなったことです。現在フリーストールという飼育形態をとっています。しかし、フリーストールには牛たちが自由に歩き回れるという

メリットがある反面、牛同士のけんかが発生しやすいというデメリットがありました。校舎移転後2週間経った日曜日、月1回の体格測定の日のことです。私が担当するジャージー種の腰角幅を測ろうとしたところ、明らかに腰角右側の骨がないことに気が付きました。すぐに先生を呼び、獣医さんに診てもらったところ完全に骨折しており元に戻ることはなく、場合によっては淘汰するしかないとの診断でした。幸い、この牛は痛がるような素振りはなく今のところ普通に生活できていますが、もっと早く発見できていれば何か変わっていたかとも思いとても後悔しています。

私は現在、週に2回、神奈川県相模原市内にある藤曲牧場で実習をさせて頂いています。そこでは約30頭の乳牛を飼育しており、エサやりから搾乳までほぼすべての作業を生徒にさせるため、学校ではできない貴重な体験をさせて頂いています。実習などを通して、生産性が重視される現代の酪農では、足腰の衰弱、病弱化が進み、けがが多くなっていることを知りました。乳牛は牛乳を生産してくれる大切な存在ですが、たった一つのけがでも命とりになってしまいます。実際、そうした理由が原因で淘汰されてしまう乳牛が全体の半分以上いるという事実にはショックを受けました。

一方、そんな牛たちを引き取って飼育しているところがあることを知りました。そこは、相模原麻溝公園内にあるふれあい広場というところです。そこでは、子を産めなくなったり、病気やけがが原因で牛乳を生産できなくなった牛などを引き取り、乳搾り体験用の牛として飼育しています。乳搾りを体験した子供たちは小さい手で、少し怖がりながらも一生懸命搾っていました。搾り終えた子供たちは「牛乳はあったかいね」「こうやって牛乳ができているんだね」と喜んでいました。また、飼育員の方も「乳搾り体験用の牛として飼育することは牛たちを助ける最後の手段なんだよ」とおっしゃっていたことがとても心に残りました。

このような経験から私の中である新しい夢が生まれました。一つ目は、牛にけがをさせない、ストレスを小さくする「カウコンフォート」を最優先に考える牧場を経営することです。これを実現させるために、私は「放牧を取り入れた酪農」に注目しました。牛が自由に歩き回ることでできる酪農は、牛にかかるストレスが一般的な牧場と比べてとても小さい飼育法であり、省力化にもつながる飼育方式だと考えました。二つ目は、乳房炎やけがが原因で淘汰せざるをえない牛たちに、出荷までの間のんびり過ごしてもらふ施設をつくることです。本来牛の寿命は20年ほどですが、乳牛として畜産利用される場合は5、6年とかなり短くなっています。人間の都合で本来の寿命を全うできない牛たちに、出荷されるまでの間、少しでも長くのびのび過ごしてもらふような牧場をつくりたいと考えました。しかし、乳生産ができない牛を飼うとなると、飼料代などが余計にかかってしまい、経営するには現実的ではありません。そこで、淘汰予定の牛を観光牧場用の牛として飼育すればいいのではと考えました。観光牧場の牛といっても、一日中触れ合いに出したり毎日乳搾り体験をさせるのではなく、

ストレスが少なく済むよう時間や日にちを決めて交代するなど「カウコンフォート」を大切にしたいです。けがや病気をさせないことが牛にとっても人にとってもいい酪農につながりますが、もしけがや病気になった際に「経済動物だから」とすぐに割り切らず、第二の道を作ってあげたいです。耕作放棄地が問題となっている今、それを利用した広大な放牧場で出荷までの間に放牧を行うことで、肉にも付加価値が付けられると考えています。

この夢を実現させるため、今できることを一生懸命がんばります。今は新牛舎の改善に取り組んでおり、滑って転んでしまったり、体をおつけてしまうなどのけががないよう、滑り止めの設置や、突起物などの危険な部分にはクッションを取り付けています。高校卒業後は酪農が学べる大学に進学し、高校生活で学んで経験したことを生かしながらさらに知識と技術を向上していきます。牛が最後まで「牛としての寿命を全うできる」牧場を営む日を夢見て。